

山と博物館

第55巻 第8号 2010年8月25日

市立大町山岳博物館



今年産まれたカモシカの赤ちゃん（撮影2010年6月28日）

ニホンカモシカの繁殖

宮野 典夫

山岳博物館の付属園では8個体のニホンカモシカを飼育しています。このうちツガイになっている一組から今年6月9日に赤ちゃんが誕生しました。

カモシカを育て、繁殖を進めるにはカモシカの特徴をよく知り、科学的な見地から予測を立てて対処することが大切です。しかし、それぞれのカモシカの性格やくせなどは表現しにくく、繁殖に結びつくチョットした行動異変などは飼育員の感触でとらえられるもので、これらも数字や書面にできにくいものです。目立ちはしませんが飼育員の日々の観察の積み重ねと、カモシカが飼育員を見ている感触、これらが上手にかみ合って、ここ数年の博物館における繁殖の良成績を導いてきたと感じています。

野生動物を飼育下で繁殖させる意義は、種の保存や教育的配慮による展示に供することなどがあげられます。この主旨に則って多くの動物園や水族館で様々な生物の繁殖に取り組んでいます。そのため全国の動物園等が連携し、情報交換の場を持つたり、繁殖のための貸し借りをを行っています。

ニホンカモシカに関しては国際血統登録の対象種となっていて、いわば飼育カモシカの戸籍にあたるものが集約され、世界中のカモシカの飼育状況や繁殖状況について共通の情報を各園館で持っています。また、日本動物園水族館協会で種の保存を進める動物として取り上げられ、飼育面での課題と問題解決、移動の際の個体調整などを行っています。

山岳博物館でも繁殖目的のための貸し出し（ブリーディング・ローン）を行っており、埼玉こども動物公園、富山市ファミリーパークなどで大町生まれのカモシカが飼育されています。

山岳博物館は今後も、種の保存に貢献できる施設として、また地域の皆様にカモシカを理解していただける場でありたいと思います。

（市立大町山岳博物館 館長）

ニホンカモシカを育てる

宮野 典夫

ニホンカモシカ（以下カモシカ）の赤ちゃんを動物園などの施設で育てるには、飼育員が母親代わりになってミルクをあげるなどの世話をする方法（人工哺育）と、出産した母親に赤ちゃんの面倒をいっさい見ってもらう方法（母親による哺育）がある。

山岳博物館での人工哺育は、野生から保護

された幼個体で、哺乳が必要な場合と、博物館で出産したが、様々な状況から母親の授乳では生育が難しいと判断し、子を母親から隔離することになった場合があった。
2000年（平成12年）以降山岳博物館では16例を扱い、このうち9個体を1年以上ま

育てることができた。（表1）

スとでひとつのホームレンジ（一定範囲の行動圏）を持ち、この中で、交尾・出産・子育ての繁殖行動をする。カモシカの繁殖は「1年1産1仔」といわれ、通常、1年の間に1回、4月〜7月に1頭の子どもを出産する。この時期に出産するのは、草食動物であるカモシカの赤ちゃんが離乳食として食べる草木の葉が柔らかい季節であり、とても理にかなったことである。出産の時期が10月ころまで大幅にずれたり、双子の赤ちゃんが誕生したりする例外もある。この場合、母親や子どもに負担がかかり、リスクを負うことになる。

期は9月〜12月となる。博物館での観察では、普段はほとんど鳴くことはないが、特にメスは発情時に盛んに鳴く。また、食欲が極端に減少するため残餌量で発情時期が推測できる。飼育下のカモシカにはそれぞれ愛称がある。図1に2007年の「マヤ」と「オタリ」の給餌量を示した。「マヤ」は10月上旬から残餌量の多い日が見られ、鳴き声が伴う発情が認められたのは11月8日であり、「オタリ」は12月15日であった。
2008年に出産した「クロベ」の事例では前年の12月4日から5日にかけて母親の「オタリ」が発情の徴候を示し、翌年の7月9日に出産がみられ、「オタリ」の妊娠期間は217日あるいは218日であることが判

出生年	雌雄	愛称	出生由来	出産日 保護日	哺育方法	死亡日・移動日 (死亡原因・移動先)
2000	①	メス	—	—	—	—
	②	オス	—	—	—	—
2001	③	メス	—	—	—	—
	④	オス	五十鈴	—	—	—
2002	⑤	オス	—	—	—	—
	⑥	メス	さくら	—	—	—
2003	⑦	メス	—	—	—	—
	⑧	オス	岳	—	—	—
2004	⑨	メス	さつき	—	—	—
	⑩	メス	オタリ	—	—	—
	⑪	メス	わかば	—	—	—
	⑫	オス	ハクバ	—	—	—
2005	⑬	オス	—	—	—	—
	⑭	オス	—	—	—	—
2008	⑮	オス	クロベ	—	—	—
2010	⑯	メス	—	—	—	—

表1 山岳博物館における2000年以降の繁殖

出産時期

カモシカはオスとメ



写真1 人工哺育の「さつき」(2004年5月)

妊娠期間

妊娠期間は約7カ月といわれているので、春から初夏の出産から逆算すると、交尾の時



写真2 母親による哺育の「クロベ」(2008年7月)

繁殖計画 その1
 山岳博物館では施設の状況、個体の健康状態、職員の体制などを考慮し、繁殖の計画をしている。ベアーについては最初に組んだ状態で問題がなければ、替えることはしなかつ

た。
 2009年11月4日「オタリ」に発情が見られ、飼育員が交尾の確認をした。そして、翌年の6月9日に出産がみられたので、「オタリ」の妊娠期間は、約217日で安定しているといえる。

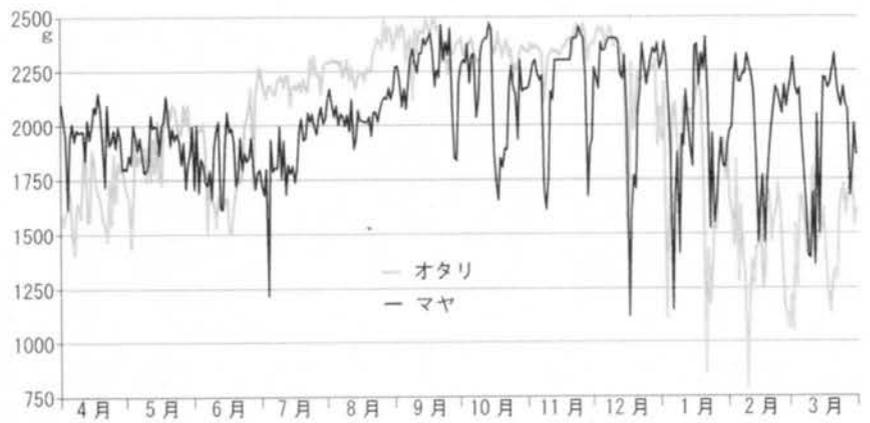


図1 「オタリ」と「マヤ」の食餌量 (2007年)

た。
 2000年までは母親による哺育を目標に作業を進めてきた。1993年以降、繁殖に供することができるメスの個体は「峯子」と「マヤ」であった。両者とも有害鳥獣駆除により捕獲された野生由来のカモシカである。「峯子」は1990年1月25日に大町市常盤西山地籍にて捕獲され、年齢は2歳と推定された。また、「マヤ」は1992年2月22日に大町市平二ツ屋地籍で捕獲され、4歳と推定された。

当時、有害鳥獣駆除により捕獲されたオスの個体もいたので、2頭のメスはそれぞれベアーを組むことができた。「峯子」は1993年に、「マヤ」は1994年に最初の子を出産した。しかし、この2個体は出産を繰り返すも、その子が順調に育つとは言いがたく、2000年まで

視して管理をした。また、繁殖の方法も「峯子」の子に限り初乳を飲んだのを確認

「峯子」の出産 (1993~2000年)

番号	雌雄	愛称	生年月日	死亡年月日	日齢
1	不明	—	1993年7月1日	1993年7月5日	4
2	不明	—	1994年7月11日	1994年9月4日	55
3	メス	—	1995年5月30日	1996年9月7日	466
4	オス	—	1996年6月18日	1996年10月22日	126
5	オス	小次郎	1997年7月14日	2000年2月29日	960
6	メス	—	1998年6月4日	1998年6月29日	25
7	メス	—	1999年5月4日	1999年6月8日	35
8	オス	—	2000年5月9日	2000年6月7日	29

「マヤ」の出産 (1994~2000年)

番号	雌雄	愛称	生年月日	死亡年月日	日齢
1	メス	—	1994年6月2日	1994年8月20日	79
2	メス	—	1995年5月24日	1995年12月22日	212
3	メス	—	1997年4月24日	1997年9月7日	135
4	メス	ユキ	1998年5月29日	1999年12月12日	562
5	メス	—	1999年5月14日	1999年11月21日	191
6	メス	—	2000年4月25日	2000年5月16日	22

表2 「峯子」と「マヤ」の出産記録



写真3 人工哺育の「岳」(2003年7月)

期から授乳時の餌の変更などを重視して管理をした。また、繁殖の方法も「峯子」の子に限り初乳を飲んだのを確認

に出産した子の平均寿命は207日であり、1年以内に死亡してしまつたのは14個体中78%に当たる11個体であった。特に2000年に「峯子」が出産し1カ月あまりで死亡した子の解剖結果では胃から母親の糞や尿と思われるものが検出された。母親のミルクの出が充分でなかったと考えられた。カモシカの乳房は外に張り出していないので観察が困難でもある。これをきっかけに2頭の採餌量の計測、健康状態のチェック、妊娠後

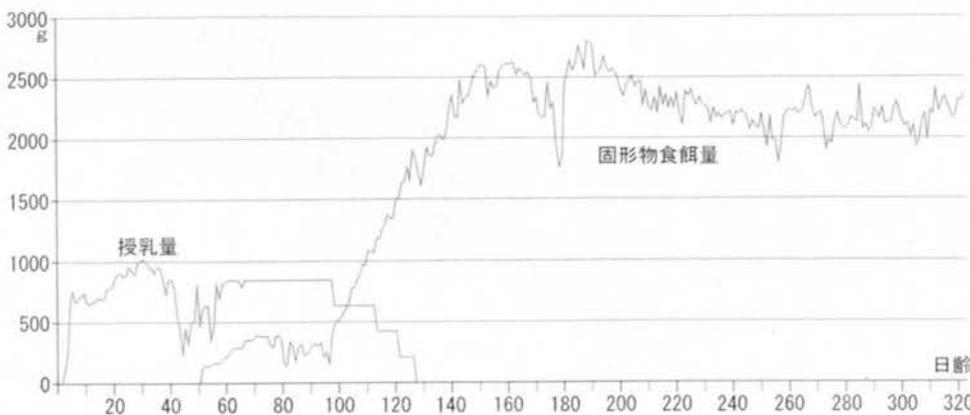


図2 「岳」の人工哺育における授乳量と食餌量

認後、子を取り上げて人工哺育をすることとした。
繁殖計画 その2
 2007年、「峯子」と「マヤ」は推定19歳となった。飼育カモシカの寿命は20数年といわれているので、両者とも高齢になってきたため繁殖に供することを避けた。一方2004年に白馬村で保護された「ハクバ」(オ

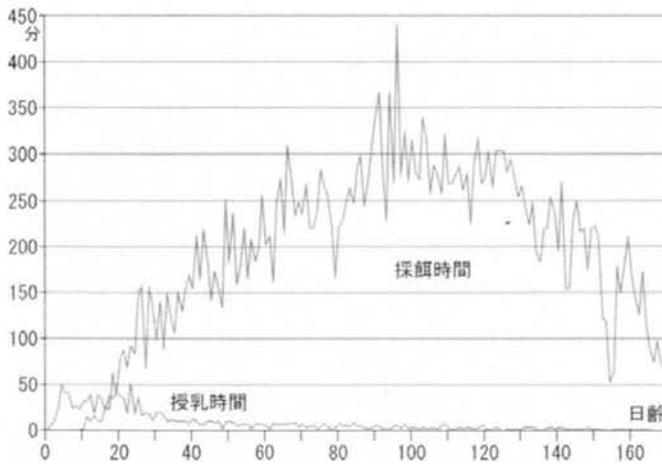


図3 「クロベ」の授乳時間と採餌時間 (2008年)



写真4 母親による哺育の「クロベ」(2004年10月)

山岳博物館でのカモシカ飼育の記録の一部を述べたが、この記録の一部を述べたが、授乳は5日目を目をピークに徐々に時間が少なくなり、固形物の食餌が主になっても授乳の行為は見られ、この記録を取りやめる寸前の12月25日(169日齢)まで観察することができた。

2008年に産まれた「クロベ」の記録である。なお、カメラの死角での行動は記録に残らないことや、授乳は母親の腹部に子が頭を突っ込んでいる時間であり、同様に餌箱に頭を入れている時間なので、この時間帯全てが授乳や採餌ではない。

人事異動のお知らせ

平成22年6月1日付で元信州大学副学長の小坂共栄 信州大学名誉教授が山岳博物館専門員(地質学)として着任しました。

山と博物館 第55巻 第8号

発行 長野県大町市大町八〇五六-一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二二-〇二二二
FAX 〇二六-二二二-二二二二
E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 大系タイムス株式会社
定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七二二二九九三

人工哺育時の餌
カモシカは草食動物であるが、生まれて直ぐに植物を食べることはなく、ミルクを飲んで育ち、徐々に草や木の葉を食べるようになる。人工哺育の場合は、牛乳を温めて哺乳ビンで与え、その後は野菜などの固形物の質や量の変更のタイミングを飼育員などが調整しなくてはならない。

2001年産まれたの「五十鈴」は12月頃から体重が伸びず、餌の食い込みも落ちてきた。その原因はカルシウム不足により歯がグラグラして固形の飼料を上手に食べることができなかつたためである。年末年始の休みも返上し、座り込んだままの「五十鈴」の口の中へ時間をかけて餌を少しずつ入れてあげる作業を続けて回復させることができた。その後はカルシウムの補給に注意しながら飼育をした。

母親による哺育時の餌
母親に子育てを任せると、子が飲んだミルクの量や体重変化がほとんどわからない。また、固形物も親と子が同じ餌箱から食べるために、子の食餌量もまったくわからない。そこで暗視カメラを用いて24時間録画して子の授乳時間と採餌時間をチェックし図3に示した。2008

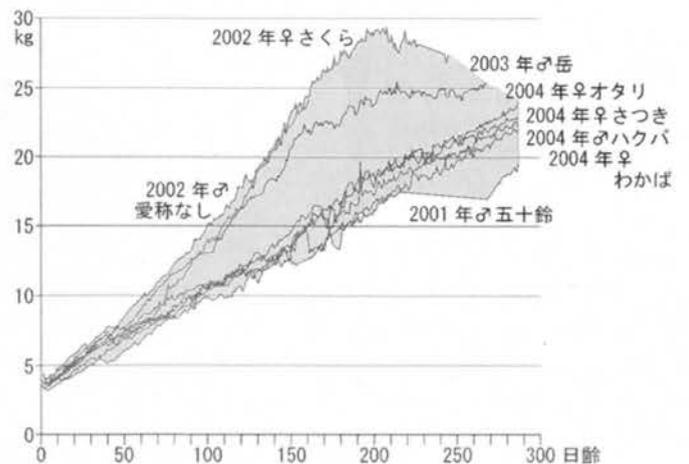


図4 カモシカの体重記録

